方向

第一〇二号　一九八九年八月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

午睡

1967-1989.7.28.　原田憲雄

あたまに伊藤をはやした
猫が
そっと藪から出て
どこかへ消えた
わたしは
河で
つりあげる
古代語法

むかしの美女は
天皇、上皇、法皇たちが
おくった艶書を

ほぐし
仏の像を
つくったが
ポストモダンの
学者は
ほこりだらけ
のカードの束を
コンピュータにほうりこみ
ベストセラーを

むくどりは牧歌をうたいたがる
木蔭の軟らかい午睡のあとで

汚濁の中で

―法華経巡礼　34―　1992.8.9.　原田憲雄

前号の「法華経巡礼33」は「方便品」の（112）偈でおわり、その偈は、現在のこの娑婆世界の衆生が、六道、すなわち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天（神）という六つの生命世界を輪廻し、そこに心を束縛され、悪い見解やよこしまな憶想におちいり、身動きならず苦悩より苦悩へと追い続けるすがたを見て、仏となった釈尊が「かれらへのわたしの同情は激しいのだ」とうたっていた。

その「かれらへの同情は激しいのだ」を、妙本は、「この衆生の為のゆえに、大悲の心を起こせり」と訳し、「大悲」にあたるところを正本は、「大哀」とする。相当する梵文は kāruṇya だった。

仏教では、一般に、「慈悲」を重んじる。慈悲は、衆生に楽を与える「慈」と、衆生の苦を抜きとる「悲」とを合わせていう。慈の原語はおおくの場合 maitrī だが、それは mitra（友）という語からつくられた抽象名詞で、特定の人に対してではなくすべての人々にもつ、最高の友情である。悲の原語は karuṇā であることがおおく、これは kṛ（そそぐ、まきちらす）あるいは kṛ（つくる）という動詞に由来する女性名詞で、人生の苦しみに嘆き悲しむことであり、さらに憐れみや同情を意味することになった。kāruṇya はおなじことばの中性名詞で、女性名詞より抽象度が高いのかもしれぬ。女性名詞の kṛpā や、形容詞としての kārunika もおなじ系統の言葉で、「悲」「悲心」と訳されることがおおいが「慈悲」とされることもある。

おなじく「悲」「大悲」「慈悲」などと訳される anukampa は、「ともに戦慄する」というほどの意で、相手の

立場や心情に対する激しい同情共感をいう。『楞伽経』にもanukampaとkrpaは見え、拙稿「ランカーの岸辺で」においてkrpaがkrp(のために悲しむ)という動詞に由来し、anukampaとともに同経の重要なキーワードだと指摘したが、『楞伽経』より早く成立した『法華経』がすでに、衆生のために、悲しみ、嘆き、戦慄し、同情し、共感する、釈尊の心情を描く言葉を、要所に埋め込んでいる。

釈尊は、すでに覚って、もはや心に動揺のなくなった人ではないのか。仏となった釈尊は、大いなる寂静、大いなる平安のうちにあり、もはや悲しむことも喜ぶこともなくなったのではないのか。大いなるニルヴァーナ、涅槃、に入った釈尊が、なぜ悲しみ、嘆き、戦慄し、同情し、共感したりするのか、愚かなわたしたちのように。

2-22. 覚りの壇でわたしの知ったこのことを、三七日を満たすまでとどまって、

よく熟慮した、それらのことを、菩提樹を見上げながらに。（１１３）

樹木の王をまばたきもせず見つめつつ、その下をめぐりあるく。

わたしの得たのは、奇異ですぐれた知識だが、衆生は愚痴で、無知である。（１１４）

そのときわたしに懇請する、梵天、帝釈、四天王、

大自在天、自在天、幾千万億の神々の群が、（１１５）

みな合掌し、うやうやしく。そこでわたしは熟慮する、わたしは何をなすべきか。

わたしが覚りをほめ讃えても、これらの衆生は苦悩にひしがれ、（１１６）

愚かなかれらは、わたしの説いた法をののしり、ののしったため地獄に堕ちよう。

なにも語らぬほうがよい、いまこそわたしは寂静の涅槃にはいるべきなのだ。（１１７）
けれどそのとき、過去の諸仏と、かれらの巧みな方便を、想い起こした。
いまやわたしも、仏の覚りを、三つに分けて説きあかそう。（１１８）
この法につき、わたしがこのように考えたとき、十方の他土の仏が、
すがたを現わし、「そうだ、そうだ」と激励した、雷のように声ひびかせて。（１１９）
「いいことだ、ムニよ、世界の無上の導師よ、最勝の知識に到達し、
世の諸導師の巧みな方便を思い出し、それに習うということは。（１２０）
われわれもまた最高の立場を覚り、三種に分けて説きあかす。
意向の劣った無知なひとらは、仏になるといわれても信じられまい。（１２１）
だからわれらはその原因を把握して、巧妙な方便つかい、
それぞれの果報を望めと宣告するが、かくて多数をボサツへと導くのだ」と。（１２２）
わたしはそのとき歓喜した、雄牛のようにすぐれた仏の雷とひびく声聞いて、
心踊って、あの救世者にわたしはいった「最勝の大仙に敬礼します。（１２３）
わたしもまた行なうでしょう、聡明な世界の導師がいわれたように。
わたしもまた、激動する、この苛酷な、衆生の汚濁の中に生れたのだから」（１２４）
so 'haṃ viditvā tahi bodhimaṇḍe saptāha trīṇi paripūrṇa saṃsthitaḥ /

arthaṃ hi cintem imam evarūpaṃ ullokayan pādapam eva tatra //113//
prekṣāmi taṃ cānimiṣaṃ drumendraṃ tasyaiva heṣṭe anucaṅkramāmi /
āścarya-jñānaṃ ca idaṃ viśiṣṭaṃ satvāś ca mohāndha avidvasū ime //114//
brahmā ca māṃ yācati tasmi kāle śakraś ca catvāri ca lokapālāḥ /
maheśvaro īśvara eva cāpi marud-gaṇānāṃ ca sahasra-koṭyaḥ //115//
kṛitāñjalī sarvi sthitāḥ sagauravā arthaṃ ca cintemi kathaṃ karomi /
ahaṃ ca bodhīya vadāmi varṇān ime ca duḥkhair abhibhūta sattvāḥ //116//
te mahya dharmaṃ kṣipi bāla bhāṣitaṃ kṣipitva gaccheyur apāyabhūmim /
śreyo mama naiva kadāci bhāṣituṃ adyaiva me nirvṛtir astu śāntā //117//
purimāṃś ca buddhān samanusmaranto upāyakauśalya yathā ca teṣām /
yaṃ nūn ahaṃ pi ima buddha-bodhiṃ tridhā vibhāṣyeha prakāśayeyam //118//
evaṃ ca me cintitu eṣa dharmo ye cānye buddhā daśasu ddiśāsu /
darśinsu te mahya tad-ātmabhāvaṃ sādhuṃ ti ghoṣaṃ samudīrayanti //119//
sādhū mune lokavināyakāgra anuttaraṃ jñānam ihādhigamya /
upāyakauśalya vicintayanto anuśikṣase lokavināyaṃkānām //120//
vayaṃ pi buddhāya paraṃ tadā padaṃ tṛdhā ca kṛtvāna prakāśayāmaḥ /

hīnādhimuktā hi avidvasū narā bhaviṣyathā buddha na śraddadheyuḥ //121//

tato vayaṃ kāraṇa-saṃgraheṇa upāyakauśalya niṣevamāṇāḥ /

phalābhilāṣaṃ parikīrtayantaḥ samādapemo bahu-bodhisattvān //122//

ahaṃ c udagras tada āsi śrutvā ghoṣaṃ manojñaṃ puraṣaṣabhāṇāṃ /

udagra-citto bhaṇi teṣa tāyināṃ na mohavādī pravarā maharṣī //123//

ahaṃ pi evaṃ samudācariṣye yathā vadanti vidu lokanāyakāḥ /

ahaṃ pi saṃkṣobhi imasmi dāruṇe utpanna sattvāna kaṣāya-madhye //124//

よく知られているように、釈尊は、国王の子として生れ、体力、知力にすぐれ、世間的には何一つ不自由はないようにみえた。しかし世間的に不自由のないような境遇にも、生・老・病・死という、人間の力ではどうにもならない問題があることに気づき、その状況を「苦」と観じ、「苦」から脱却する方法を発見しようとしたのが、家を出て修行者となる動機であった。人生の苦しみを嘆き悲しむことが、後に仏となる釈尊の旅立ちの発端だった。資質に相違はあっても、人生の苦しみを嘆き悲しむ点において、わたしたちと変わりはない。釈尊が出家した当時、思想家や宗教家と呼ぶべき人達がたくさんいた。かれらのなかには釈尊とおなじように人生の苦しみを脱却しようとの願いから修行者になった者もいるが、思想家や宗教家の団体の指導者になること自体を目標とする者が多かった。初めは釈尊と同じ目的で修行にはいっても、問題を解決するまでに、世の風潮に染まって、小さな団体の、大きな団体の指導者となって、そこに甘んじ、問題の追求に励まなくなる者が多かった。釈尊の修

行者としての名声が高まると、一緒にやろうじゃないかといった誘いかけが、小さな団体や、大きな団体の指導者からたびたびあった。釈尊はそれらをしりぞけ、ついに問題を解決した。「覚り」であった。その覚りは、団体の指導者となって満足するような思想家や宗教家に理解されるものではない。感性においても、思索力においてもすぐれたかれらでさえ理解しがたい「覚り」を、戦争と収奪に明け暮れる政治家や軍人、一銭の利を争って奔走する商人、ものを思う暇もなく身を虐げなければ今日の糧さえ得られぬ農家のひとびとに説いても、顧りみられるはずがない。覚りを開いて、すがすがしい清朗平安を楽しんだのちに、やってきた感想がこれであった。

苦労して私の覚りえたことを、／　いままたどうして説くことができようか。／　貪り、怒りにとりつかれた人々が、／　この法をさとるのはやさしくない。／　世間の流れに逆らって、微妙であり、／　深遠で、分かりにくく、こまやかだから、／　貪欲の暗闇に住む者には見がたいのだ。

『マハーヴァッガ』の伝える、このときの釈尊の困惑と躊躇を描く詩句は、「法華経巡礼27」に紹介したが、ここにあるのは、真実を見出した人なら、その真実が小さなものであっても、おぼえるところの、感動と、よろこびと、そして次いでやってくる、その真実を真実と証明することのむつかしさ、また伝達のほとんど不可能であること、についての嘆きであろう。

真実は、みずからを隠そうとはしない。見たくない人が、見ようとしないのであり、見せたくない人が、隠そうとするのである。ひとが隠しても、真実はみずからを隠そうとしないから、いずれはあらわれる。しかし、見たくない人はあらわれても見ようとしないから、見えない。真実が見えないというのはそういうことであって、

真実が隠れているのではない。わかってみれば、あまりにも簡単で、自明のことであって、それを真実ということさえおおげさすぎる。しかし自明のことだから、ひとはそれを見たがらず、認めたがらないのだ。見たがらず認めたがらなくても、簡単に自明であるということが、真実の微妙さであり、深遠さであって、微妙で深遠だから、分かりにくく、こまやかで、貪欲の暗闇に住む者には見がたく、かれらが主流をなすのが「世間」なのだから、真実は世間に逆らうのだ。飲みたがらぬ馬に水飼うことはできず、聞きたがらぬ人に真実を語ることは困難である。

「方便品」の（113）（114）の偈がうたうのは、釈尊の成道、すなわち覚りを開いた、直後の困惑と躊躇の感情である。これを妙本は、

我れ始めて道場に坐し、樹を観じまた経行し、
三七日の中において、かくのごとき事を思惟す。
わが得しところの智慧は、微妙にして最第一なり。
衆生の諸根は鈍にして、楽に著し痴に盲いらる。
かくのごとき等類を、いかにしてか度すべき。

と、五言十句に訳す。

わたしが「菩提樹」としたところの梵文は、妙本のようにただの「樹」をさす言葉だが、妙本では省略している次の偈の「樹木の王」と同じもの。それがすなわち菩提樹なのだから、解説をこめて訳した。

ためらう釈尊に、法を説くことを勧めるのは、『マハーヴァッガ』では、世界の主である梵天だけだった。それがここでは、帝釈、四天王、大自在天、自在天、幾千万億の神々が加わっている。誇張といえばそれに違いはないが、原始経典の簡潔が事実に近いともいえまい。心の一瞬のゆらぎも精細に描けば幾十ページをついやす例ば ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』にもあった。釈尊の三七日の困惑と躊躇のなかには、ここに挙げられた神々のほかに、悪魔のたぐいも数限りなく出入りしたはずである。

『マハーヴァッガ』では、釈尊は、梵天の三度の勧請で説法を決意するが、ここでは、過去の諸仏を「想起」し、一つの真実を三つに分けて説く「方便」と、過去の仏と現在十方他土の仏の「讃嘆」が加わっている。

「加わっている」というのは、『マハーヴァッガ』を基準としての言い方で、釈尊の決断の重大さを問題とする観点からすれば、『法華経』が、はじめてこれを正当に描いた、とも考えうる。

釈尊が、しかし、説法を決断する最後の理由は、「激動する、苛酷な、衆生の汚濁の中に生れたのだから」であった。激動する、苛酷な、汚濁に満ちたこの厭うべき娑婆世界ではあっても、その娑婆世界の、衆生のひとりとして生れたのが釈尊であった。覚りによって汚濁から離れうるとしても、いまもなお汚濁のなかに苦しむ他の衆生を見捨てるわけにはゆかぬ、という同情共感が、このときの釈尊をつき動かしていた。

『法華経』の説く「想起」は、過去のいっさいの現前である。最初の日月燈明如来のうるわしい教化活動はもとより、釈尊自身の太子時代の、愛欲に溺れた夜々のしどけない姿も、すべてありありと現出しているのである。衆生の愚かさを、愚かだとはいいえても、おのれもまたその愚かさのなかから歩み出したのであった。汚濁から

出発していまの清朗な覚りに到達したのであるからには、その清朗は、娑婆世界の汚濁に裏打ちされているといわなければならぬ。それが釈尊の覚りを支える、「縁起」の理論であろう。釈尊もそのひとりであった衆生、かれらのすべてが覚らない限り、釈尊ひとりの覚りは、その成立の足場を失うだろう。仏とは、衆生のなかから出てくるものであり、衆生の苦悩を遮断し、無視するところに、仏はない。覚ったいまの清朗さを娑婆世界の汚濁にもちかえり、浸透させなければ、娑婆世界に生れた仏とは言えないのだ。とはいっても、自分の言うことなど誰も本気で聞くまい、ということは、釈尊にはわかっていた。分かりすぎるほどわかっていた。人道主義、理想主義、その他のあらゆるうつくしいスローガンも、かけごえも、アピールも、この娑婆世界のほとんどすべての衆生は、聴こうとせず、聞いても屁とも思わず、だれがどんなにうまく喋ってみせても、衆生の大部分は損得によってしか動かないことを、釈尊は骨身に沁みて知っていた。だから困惑躊躇が続いたのだ。長いためらいのち、過去の仏と現在の他土の仏たちもまた、同じ条件のなかで法を説いていることを知り、かれらの讃嘆に励まされて、やっと決意する。

（123）「最勝の大仙に敬礼します」の「敬礼します」は、namo ha vādī を訳したものだが、Kn本では namohavādī とし、それならば、最勝の大仙は「嘘はつかない」ということになろう。梵語諸本はほぼ両方に分岐し、その面で、いずれを正しいとは決定しがたいようである。文章としてみても、ここでの釈尊の長いためらいと、重苦しい決断を現わすことばとして、ともに不適当とはいえないが、妙本は「喜んで南無仏と称す」と訳している。正本は、この部分に相当する訳文は見当たらない。

2-23. このようにわたしは考え、シャーリプトラよ、そこでヴァーラーナシーへと出発した。
そして五人のビクたちに、わたしは語った、寂静の法を、方便として。（１２５）
かくてわたしの法輪が回転しはじめ、涅槃という語が世界に現われ、
同様にアラカンという語、法という語、サンガという語も現われた。（１２６）
すくなからぬ年月かけてわたしは説き、涅槃の境地をあきらかにし、
輪廻の苦しみはこれで最後にするのだと、わたしはいつも説いているのだ。（１２７）
そのときわたしは、シャーリプトラよ、両足の最高の人の子らを見る。
最勝の無上道へとかれらは旅立ち、幾千万億多数であり、（１２８）
わたしのそばにちかづいて合掌した、みな、尊敬のこころをもって。
かれらはかつてジナたちから法を聞いた、種々さまざまに多数の巧みな方便として。（１２９）
わたしはその瞬間に考えた、無上の法を説くべき時がやってきた、
そのためにこそわたしはこの世に生れたのだ、今こそ無上道を説きあかそう。（１３０）
信じがたいものではあろう、うわっつらにこだわる者、幼稚な知能の連中や、
傲慢になった無知な者には。けれども覚りに志すボサツたちなら聞くことだろう、と。（１３１）
こころおどり、そのときわたしは歓喜して、ためらいをいっさい捨て、
スガタから生れた子らのただなかで説き、かれらを覚りへみちびいた。（１３２）

このような仏の子らを見るならば、あなたは疑いを捨てるだろう。

千二百人のアラカンたちも、この世ですべて、仏となるにちがいない。（１３３）

このような過去の救世者、未来のジナ、あるいはいまのわたしにとっても、

法というもののありかたが、いかに分別を離れたものかを、わたしはきみたちに語るだろう。（１３４）

tato hy ahaṃ śārisutā viditvā vārāṇasīṃ prasthitu tasmi kāle /

tahi pañcakānāṃ pravadāmi bhikṣuṇāṃ dharmaṃ upāyena praśānta-bhūmiṃ //125//

tataḥ pravṛttaṃ mama dharmacakraṃ nirvāṇa-śabdaś ca abhūṣi loke /

arhanta-śabdas tatha dharma-śabdaḥ saṃghasya śabdaś ca abhūṣi tatra //126//

bhāṣāmi varṣāṇi analpakāni nirvāṇa-bhūmiṃ c upadarśayāmi /

saṃsāra-duḥkhasya ca eṣa anto evaṃ vadāmi ahu nitya-kālaṃ //127//

yasmiṃś ca kāle ahb śāriputra paśyāmi putrān dvipadottamānāṃ /

ye prasthitā uttamaṃ agrabodhiṃ koṭī-sahasrāṇi analpakāni //128//

upasaṃkramitvā ca mamaiva antike kṛtāñjalīḥ sarvi sthitāḥ sagauravāḥ /

yehī śruto dharma jināna āsīt upāyakauśalya bahu-prakāraṃ //129//

tato mama etad abhūṣi tat kṣaṇaṃ samayo mama bhāṣituṃ agradharmaṃ /

yasyāhaṃ arthaṃ iha loki jātaḥ prakāśayāmi taṃ ihāgrabodhiṃ //130//

duḥśraddhaṃ etu bhaviṣyate 'dya nimitta-saṃjñīn iha bāla-buddhināṃ /
adhimāna-prāptāna avidvasūnāṃ ime tu śroṣyanti hi bodhisattvāḥ //131//
viśāradaś cāhu tadā prahṛṣṭaḥ saṃlīyanāṃ sarva vivarjayitvā /
bhāṣāmi madhye sugatātmajānāṃ tāṃś caiva bodhāya samādapemi //132//
saṃdṛśya caitādṛśa-buddhaputrāṃs tavāpi kāṅkṣā vyapanīta bheṣyati /
ye cā śatā dvādaś ime anāsravā buddhā bhaviṣyant imi loki sarve //133//
yathaiva teṣāṃ purimāṇa tāyināṃ anāgatānāṃ ca jināna dharmatā /
mamāpi eṣaiva vikalpa-varjitā tathaiva haṃ deśayi adya tubhyaṃ //134//

ここでは「法というもののありかたが、いかに分別を離れたものか」という言葉に注目しておこう。分別とは、思惟一般をさすが、分析や総合を方法とする思考、とでもいえばよかろうか。拙稿「ランカーの岸辺」でくどいほど述べた。この稿でもまたたびたび出てこよう。

2-24. いつか、どこかに、どうにかして、雄牛のような人たちや、
無限の眼力をもつ者が、世に現われて、このように法を説くとしても、（１３５）
それはもう得がたいのだ、この無上の法には、幾千万億カルパを経ても。
それはもう得がたいのだ、無上の法を聞いて信じるこのような衆生たちは。（１３６）
ウドンバラの花のように得がたいのだ、いつか、どこかで、どうにかして、現われようが、

人々にとってはこころよく、人と天との世界にとって不思議なものだ。（１３７）
さらに不思議なことを言おうか、このように語られた法を聞き、ともに喜び、
一言なりと讃えるならば、一切の諸仏に供養したことになる。（１３８）
これについての疑惑と疑念を捨てるがよい、法の王者のわたしが宣告するのである、
わたしは無上道を勧めるのだ、わたしの弟子には「声聞」はいない。（１３９）
これをあなたの、シャーリプトラよ、秘要とせよ、わたしの弟子のすべての者も、
これらすぐれたボサツたちも、わたしの秘要をたもつがいい。（１４０）
なぜなら五濁の時代には、衆生は卑劣で、邪悪であり、
愛欲にめしい、思い愚かで、覚りを求める心などかれらには無い。（１４１）
わたしの道はただ一つ、あのジナによっても説かれたものだと聞いても、
未来の衆生は動揺し、この経をなげうって、地獄に堕ちることだろう。（１４２）
だが、恥を知り、輝かしく、最勝の無上道へと旅立った衆生もいるだろう。
だからわたしの心おどり、かれらのために一乗を説き、かぎりなく讃嘆するのだ。（１４３）
導師たちのこのような説法は、最上であり広大である巧妙な方便で、
莫大深遠なことばで語られ、未熟な者にはさとりがたい。（１４４）
それゆえきみらは、仏たち、世界の師、救世者の深遠なことばを知って、

疑惑を捨て、疑念を除けば、仏となろう。そのことは手ぶるかたちで献言せよ。

以上が、聖なる「妙法蓮華」という法門の方便品第二。

kadāci kahiṃci kathaṃci loke utpādu bhoti puruṣarṣabhāṇām /

utpadya ca loki ananta-cakṣuṣaḥ kadācid etādṛśu dharma deśayuḥ ||135||

sudurlabho īdṛśu agradharmaḥ kalpāna koṭī-nayutair api syāt /

sudurlabhā īdṛśakāś ca sattvāḥ śrutvāna ye śraddadhi agradharmam ||136||

audumbaraṃ puṣya yathaiva durlabhaṃ kadāci kahiṃci kathaṃci dṛśyate /

manojña-rūpaṃ ca janasya tad bhaved āścarya lokasya sadevakasya ||137||

ataś ca āścaryataraṃ vadāmi śrutvāna yo dharmam imaṃ subhāṣitam /

anumodi ekaṃ pi bhaṇeya vācaṃ kṛta sarva-buddhāna bhaveya pūjā ||138||

vyapanehi kāṅkṣām iha saṃśayaṃ ca ārocayāmi ahu darmarājā /

samādapemi aham agrabodhau na śrāvakāḥ kecid ihāsti mahyam ||139||

tava śāriputraitu rahasyu bhotu ye cāp ime śrāvaka mahya sarve /

ye bodhisattvāś ca ime pradhānā rahasyam etan mama dhārayantu ||140||

kiṃ kāraṇaṃ pañca-kaṣāya-kāle kṣudrāá ca duṣṭāś ca bhavanti sattvāḥ /

kāmair ihāndhi-kṛta bāla-buddhayo na teṣa bodhāya kadāca cittam ||141||

śrutvā ca yānaṃ mama etad ekaṃ prakāśitaṃ tena jinena āsīt /

anāgate 'dhvāni bhrameyu sattvāḥ sūtraṃ kṣipitvā narakaṃ vrajeyuḥ ||142||

lajjī śucī ye ca bhaveyu sattvāḥ saṃprasthitā uttamaṃ agrabodhiṃ /
viśārado bhūtva vadeṃi teṣāṃ ekasya yānasya ananta-varṇāṃ //143//
etādṛśī deśana nāyakānāṃ upāyakauśaryaṃ idaṃ variṣṭhaṃ /
bahuni saṃdhā-vacanehi coktaṃ durbodhiyaṃ etaṃ hi aśikṣitehi //144//
tasmād dhi saṃdhā-vacanaṃ vijāniyā buddhāna lokācariyāna tāyināṃ /
jahitva kāṅkṣāṃ vijahitva saṃśayaṃ bhaviṣyathā buddha janetha harṣaṃ //145//
ity ārya-saddharmapuṇḍarīke dharmaparyāya upāyakauśalya-parivarto nāma dvitīyaḥ //

お盆の頃

1989. 8.

原田慶

◇カンナ

明け方に見た時は、青だと思ったアサガオの花が、昼頃、気がついたらピンクになっていた。アサガオは紺色の大きい花がいいなあと思う。

同じ花でも色によって感じが違う。庭のカンナは黄色い花ばかりなので、主人が赤いカンナを植えようと、毎年いう。黄色のカンナはさびしい。夏の花は濃い色がよく似合う。赤とまじっていれば黄色も映えるのだが、夏が過ぎると二人とも忘れてしまって、赤いカンナの球根を買って来ないから、今年も、黄色い花ばかり咲いている。あまりほめてやらないうちに、花は枯れて、先の方で折れている。そのくせ次々と咲いていつまでも咲く。

すぐ近くにナツズイセンが、紫がかった透明なピンクで、矢車のような、はでな花を咲かせるので、誰でも気がついて、あの花は何という花ですか、とたずね、きれいですね、とほめる。すぐ傍で、黄色いカンナがそっと立っている。

◇　トンボ

今年は、麦藁のような色の小柄なトンボがたくさん来る。ハッチョウトンボというのだろうか、夏の初めには青いシオカラトンボが飛んで来たが、暑くなってから来なくなった。「まえには、手で捕まえられるくらいたくさん来たのに、この頃はトンボが来ない」と娘が嘆く。だから私はトンボを見たら、娘を呼んで「トンボがいるトンボがいる」とおしえる。

◇　ショウジョウバカマ

……この細流に点々と、猩猩袴が咲出る。と知ったとて、決して引き抜き給うな。猩猩袴は水質、水温、水流に敏感なので、植えたとて根付かず、花を折り取ってもすぐに萎れて見るかげもなくなる。

〈　花ごよみ　　杉本秀太郎著　〉

二十年ほどもまえ、安土城跡の谷川から持ち帰ったショウジョウバカマは、それから何年もこの庭で花を咲かせた。今ではこの時に持ち帰ったものは、一株だけがのこっている。

三年まえ、高雄へシダレザクラを見に行って、一株だけショウジョウバカマを持って帰った。その六月に「花

ごよみ」をいただいて、あっと思ったがおそかった。しかしその翌年の春にはこれがつぼみを持ったのだった。

私は杉本先生の千代子夫人に手紙を書いて、もし花が咲いたらお知らせします。などと言っていたが、花は小さくちぢかんで咲いたので黙っていた。それからもせっせと水をやったが、株はやせるばかりで、赤ちゃんに逆戻りしたように小さくなり、ついに花は咲かなかった。水道の水ではやはりだめなのだろう。水質、水温、水流に敏感なので、と「花ごよみ」にあった。

安土のショウジョバカマが咲いた頃は、まだこの庭の井戸に、地下水がたっぷりと、ポンプの口から流れ出していたことを思い出した。

◇ カボチャ

生ごみを埋めた所からいくつも芽が出た。その中の二本ほどはつるも伸びたが、深い地中から出て来ているせいか元気がない。根元に肥料を入れても、吸収することができないのだろう、雄花ばかりをぽかぽかさかせていた。「養分が足りないから、雌花はつかないのでしょう」と話していたが、細いつるの先のほうで、木につかまって這いあがりやっと実をつけた。

小学生の時、戦争に負けたあと、堤防の土手に子供が一人に一つずつ穴を掘って、カボチャの種をまいた。そのカボチャに実がなったかどうかを、全然おぼえていない。

◇ 花屋さん

七月三十一日に妙見堂の松と、弁天さんのさかきを持って来て、「次は六日にお盆のお花を持ってきますさかい」と花屋さんが言った。この人は一度もまちがえたことはないので安心していたから、私は「はい、よろしくお願いします」とだけ言った。

花屋さんが玄関の戸をしめてから、主人が気がついて、

「六日では遅いのとちがうか、六日はお盆の法要の当日だが、それでいいのか」

といった。「そうや、五日に持って来てもらわんと、六日は九時に法要が始まるのやさかい、間にあわへんのやわ」と思って、私は花屋さんの後を追って駆けて行った。いぜんのようにリヤカーを引いているのではないから、私が門まで行った時、花屋さんの自動車は、角を曲がって千本通りへ出て行った。

「ちゃんと紙に書いて頼んでおいたのですから、六日のお盆の法要の花を、というつもりやったんやと思いますけどね。あの人は今までに、まちがえはったことはありませんから」

と私は説明した。それでも念のために電話をして確かめておくほうがいい、と主人が言うので、少し日をおいてから電話をした。「五日にお花を頼んでおいたのに、あなたは六日と言ったが、それはまちがいで五日ですからよろしく」などと言ったら、けんかをしているようなものだから、

「六日がお盆の法要ですので、五日にお花をお願いしていたと思いますが」

と私は言った。

「はあ、おくさんまえにそうゆうてはりましたやろ」

「はい、そうでしたね。その時にお墓の小菊と、本堂にはリンドウも入れといてくださいね」

「はあわかってます、五日の朝、いつもとおんなじぐらいの時間に、ちゃんとして持ってよせてもらいますさかい」

やっぱりこういうことだった。たった一言「六日」と言わずに「五日」と言ってくれれば、そうでなければ、「六日のお盆の花を」とでも言ってもらえば、私が無用の電話をして、お互いに妙に間の抜けた思いをしなくてもよかったのになあ、という気がした。

◇ 夜の音

あの蓋はなにの蓋だろう、と夜中に目が覚めて考えていた。ゴットンと音がする。昼は騒がしいので、気にならないが、夜が更けて静かになると、重い音がゴットンと響く。ちょうど門の前で、道の中央にある大きな鉄の蓋は何だろう。

下水は道の両側を通っていて、二十メートルくらい西へ行って、丁字路に突当り、大きな土管に受けられる。とすると水道だろうか、蓋の中心には京都市のマークが入っている。自動車がとおる度に音がする。自動車が上に乗った時に動くのか、それとも風圧で、蓋が浮き上がるのか、ガッタンとかゴットンとか音がする。

何年かまえに、酒に酔って、門をひどくたたいた人があった。何事かとびっくりしたが、かんぬきで閉じてあるから、ドンドンといっしょにゴットンゴットンと響いた。あの鉄の蓋は、道の真ん中にあるのだから、車が通り越す時の風圧で音がするというほうが、当たっているだろうな。などと考えているうちに、眠ってしまった。

朝起きて、門をあけて道路の蓋を見にいった。足でとんと踏んでみたが、蓋はほんの少しも動かない。まっす

ぐ西へ目をやると、丁字路の中央にも同じ蓋がある。そこまで行って南北を、目でたどってみると、ずっと同じくらいの距離を置いて、鉄の蓋が続いていることに、はじめて気がついた。

◇　おしょらいさん

六日、雨が降ったりやんだりする中、お盆の法要が無事にすんだ。「お盆の法要に、雨が降ることなんてめったにないのにめずらしいな、何かいい事があるで」と主人が言った。そういうことを言わない人だのに、めずらしいことを言う。よく、めずらしいことを言うと「雨が降る」と言う。

檀家の若い奥さんが、「京都では、おしょらいさんを迎えるのにどうするのでしょうか」とたずねられた。私はそういう行事を、知らなかった。「六道さんへ迎えに行くとか聞きますが」と言われる。私の生れた土地では七日に山の墓地へ掃除に行き、精霊を迎えてお供えをするようだった。昔は岐阜提燈を吊るしていたこともあったけれど、今はどうなのか知らない。後で主人にたずねたら「六日にお盆の法要をしたのだから、それに参ってきはったらそれでいいんや」と言った。

千本の「えんま堂」や「釈迦堂」へ行く人もあるらしい。自分の家の墓所とは別に、「六道さん」や「えんま堂」などへ行くのはどうしてだろうか。東山区松原通東大路にある六道珍皇寺には、小野篁が冥土へ通った入り口だという古い井戸があると聞いている。

京都の伝説散歩という本に、珍皇寺には、開基慶俊僧都が鋳させた、すぐれた鐘があり、その不思議な響きは十万億土の冥土にまでとどき、亡者はその響きに乗ってこの世に戻ってくると、人々に信じられていたと書かれている。今、この寺にある鐘は、明治時代の作だそうである。そしてこの珍皇寺では毎年、八月七日から十日ま

での間「六道まいり」といって、「精霊迎え」の行事が行なわれている。これは、冥界にいる先祖や知人の精霊をお盆の間、自分の家の仏壇に呼び戻す行事で、経木に故人の法名や俗名を書き入れ、境内の「迎え鐘」を鳴らした後、経木に榊の葉で水をかけて、霊を呼び戻すとされている。桓武天皇がこの地を葬場に定められて、東山一帯が墓場になっており、珍皇寺のあたりが、「六道のつじ」といって、冥土への入り口だと信じられていたということである。

たずねておられた奥さんは、昨年、自分のお母さんを亡くされたのだけれど、「六道まいり」に行かれたのだろうか。

◇六斎念仏踊り

九日、夜八時から、壬生寺で六斎念仏踊りがあった。万燈供養会で、お地蔵さんのおいでになる本堂の前、軒から床まで一面に四角の提燈に戒名や供養を書いたのが、それぞれに電燈を入れて掛けられている。光りの壁である。その左のほうに千体仏塔があり、これも照明に浮かびあがっていた。本堂の前に高さ一メートルほどの舞台が作られていて、まわりに赤と白のどんぐり飴のような提燈が四辺に十個ずつ吊るされている。夕方から何度もにわか雨が降ったので、外の舞台で踊りをするか、講堂の中でするか、見合わせていて、八時になっても始まる気配がなかった。広い境内のあちこちに立っている人や、石に腰掛けている外国人など、暗いのでよくわからないが、夕涼みをしているようにひっそりとして、明るい本堂とその前の舞台を見つめている。

もう降らないと判断されたのだろうか、八時半ごろになって、舞台の傍に止めてあった自動車の中から荷物が

取り出されると、「中堂寺」と紺で染め抜かれた浴衣を着た人が、本堂から出てきた。子どもが七人、大人が十にんほど、荷物の中から太鼓や鉦を出して正面、奥の方に並べる。鉦は、台を組み立てて吊るす。豆太鼓と、それよりすこし小さいのと、樽のようなのと、どれも胴ににぎりがついている。それを左手で握って、右手で細い棒のようなバチで叩いて踊る。だれもが太鼓や鉦をたたき、笛を吹いているので、どの人が歌っているのかわからないが、突然なんとも張りのあるいい声が境内に響いた。「発願」という初めの踊りである。静かだった境内が急に生きいきしてくる。六斎念仏は太鼓踊りだから、笛が底を流れ、鉦がリズムをとって、太鼓が主役である。胴のふくらんだ小さな桶のような豆太鼓をもった人が三人ずつ二列にならび、いちばん前にいる二人が、交代で主になって踊る。その間、ほかの人たちは太鼓の胴をたたいてリズムをとっている。その時の鉦は、人の高さに合わせた丁字形の棒に二つ吊り下げて、ふたまたになった槌でたたいている。

曲によって打ち方が変わる。「七草」というのだろうか、二人が中央で豆太鼓を左右に振りながら、そのまま腕をまわして輪を描き、中腰ではねて踊る。二人が交代でまわりながら入り交じってもつれるように踊り、はねて踊る方と太鼓を打つ方とに何度も代る。これは大変な踊りだったが、ふたりのうち一方の人は七十六才だということだった。他にも「六段」「すがらき」「石橋」「祇園囃子」など十曲余りあるが、「四つ太鼓」というのは、三才の男の子が笛に合わせてじょうずにたたいたので、集まっていた人は手をたたいた。木の枠の中に小さな太鼓を四つはめ込んで、それを笛に合わせて約束通りにたたくのである。

「橋弁慶」という念仏狂言もあり、夜の電燈のなかで長刀を振りまわす弁慶、ひらりひらりとかわす牛若丸の無言劇は、夢のようにゆっくりゆっくり動いて、見ていた子どもたちは、いつの間にか、舞台につかまって見上げていた。遠くの石に座っていた人達も、だんだん 舞台の近くまで引き寄せられて、集まっている。明るい舞

台だけを見つめていると、わたしたちの立っている所が、うす暗い、雨に濡れた土の上であることもすっかり忘れていた。

「お精霊様の迎え鐘は静かについて下さい」と鐘楼の下に張り紙がしてあり、精霊供養の踊り念仏は、そこだけが明るい板の舞台で、続けられている。

九時三十分を少しすぎて、わたしは寺の門を出た。どの家も戸を閉めて、町は静かだった。太鼓も鉦もすぐに聞こえなくなった。

◇ 子どものお供え

お盆には、家を離れている娘、息子といった人達が、家族連れで墓参にこられる。子どもの声がにぎやかに響く。「おじいちゃん、おじいちゃん」と石に呼びかける幼い声を聞くと、そのおじいちゃんを知らないはずの孫が、どのように教えられてきたのかと不思議な気がする。

朝、墓地の掃除に行ったら、小さな果物が塔のまわりの石の上に並べられていた。みかんかなと思ったら、近くにある柿の木から落ちた小さな実だった。直径五センチほどで、やっと柿の実らしくなってきたところだのに、虫がついたのか、たくさん実ができすぎて、柿の木がふり落とすのか、柿の実として成熟することのできないまま、毎日いくつか落ちるのである。それを子どもが、一つ一つ拾って供えたのだろう。わたしはいつも箒をつかいながら、ころがっている柿の実を、ゴルフボールのように、コンとたたいてころがしたりしていたのだった。このような不注意を、毎日どんなにたくさん繰り返していることだろうか。子どもにとっては小さくても柿の実にはちがいなかったのだろう。わたしも落ちていたあおい柿を拾って、塔の前の石の上に置いた。